

浅野千咲

要旨

ウェールズ語（印欧語族ケルト語派、連合王国）の定動詞は人称と数に一致するが、受動では人称と数が標示されない非人称形が用いられる。従来の研究においてこの形は結合価の減少に関わる形式として捉えられ、分析的な受動文と同じ機能をもつものとして扱われる傾向にあった。これに対し本稿は、不定かつ人間の主語を想定するという類型的な非人称構文の一典型との類似性を明示する。一方でウェールズ語の非人称形には動作主を表す句が共起できるという、非人称の典型からは逸脱した特色も見られる。本稿はこのような類似性と特異点が生まれた要因である、ウェールズ語の歴史的な背景についても明らかにする。さらに通時的な考察から分かった、目的語が主語となる受動文でも用いることができるようになったという非人称マーカーの拡張を根拠に、ウェールズ語では非人称性→他動性という方向の発展があったこと、そしてこれはアイスランド語などに見られる一般的な変化とは逆方向の発展であることを提示する。

1. はじめに

現代ウェールズ語（印欧語族ケルト語派、連合王国：以下、ウェールズ語と表す）の動詞パラダイムには、人称と数を標示しない非人称形（impersonal form）と呼ばれる形がある。本稿ではこの形を用いてつくる文を非人称文と呼ぶ。(1)のような非人称文は動作主が降格するという特徴をもつために、Awbery (1976) をはじめとするウェールズ語の統語研究においては「cael ‘get’+被動者の代名詞所有格+動名詞」という構造をもつ(2)のような分析的受動文と同一視される傾向にあった。

(1) rhybuddi-wyd y plant (gan y dyn) 【非人称過去形】

warn.PST.IMPS the children.PL (by the man.SG)

「その子供たちは（その男性によって）警告された」(Awbery 1976)

(2) cafodd y plant eu rhybuddi-o (gan y dyn). 【分析的受動文】

get.PST.3SG the children.PL POSS.3PL warn.VN (by the man.SG)

「その子供たちは（その男性によって）警告された」(Awbery 1976)

近年では Arman (2016) によってウェールズ語の非人称形は(3)のように非能格自動詞へも適用でき、また不定かつ人間の主語を想定するという性格をもつことが指摘され、分析的受動文との違いが指摘されている。Arman は非能格自動詞へ適用可能性を非人称形の著しい特徴（striking characteristics）であると述べる。

(3) rhed-ir yno 【非能格自動詞非人称現在形】

run-PRS.IMPS there

「（誰かが／人は）そこで走る」(Arman 2016: 41)

ところが類型論的観点から見ると、このような性格はトルコ語や多くの印欧語に存在する、受身の接辞を付加した自動詞を用いる非人称構文に似通っている。この類似はすでに **Frajzyngier (1986)** によっても言及されているが、データ不足のため、**Frajzyngier** はウェールズ語に関する明確な結論は示していない。よって本稿でははじめに、類型的な対照からみえるウェールズ語の非人称形と非人称の一典型との類似を明示し、非能格自動詞に適用できるという性格が特異なものではないことを主張する。

ただしウェールズ語では(4)のように非人称形が動作主を表す補部と共起できるという、非人称の典型では許容されない特質をもつ。

- (4) llen-wyd y ffynnon hynafol gan yr awdurdodau 【動作主を表す句と共起する例】
fill.PST.IMPS the well ancient by the authorities.PL
「その井戸は当局らによって満たされた。」 (Arman 2016: 46)

本稿はウェールズ語の非人称形と典型的な非人称の類似性と相違点を、ウェールズ語の歴史的な背景から説明する。またこの考察にもとづき本稿は、ウェールズ語では目的語が主語になる受動文でも非人称形が用いられるという拡張が起きたことを提示する。非人称受身に関してはロシア語やアイスランド語などに見られる、元々斜格目的語であったものが主語になることで非人称構文が生まれる変化が一般的であるが、本稿はウェールズ語で起きた非人称文→非人称受身文という発展はこのような一般的变化とは逆方向のものであることを主張する。

ウェールズ語学における非人称の研究では、類型的な対照を取り入れるものが少ない。また前述のように、データ不足のためか類型論的研究においてウェールズ語を取り上げている先行研究も数に限りがある。本研究は通時的な背景を根拠にウェールズ語の非人称形を類型上の非人称の典型と結びつけることにより、類型論からウェールズ語学、ウェールズ語学から類型論へと、双方向の貢献をなすことを目指している。

2. ウェールズ語の非人称形と非人称の一典型の類似性

当節ではウェールズ語の非人称形と非人称の一典型の類似性を提示する。非人称構文の定義について **Malchukov & Ogawa (2011 : 以下 M&O と表す)** は、ある構造における主語が [1]指示的な項でない、[2]不定である、[3]話題性をもたない、[4]無生物である、[5]動作主性（意思性）をもたないという5つのうちいずれかの特徴をもつ場合に主語典型から逸脱しているとみなし、このような逸脱が見られる構造を非人称構文としている。これは機能的な見方からの定義である。より形式を重視する立場では文法的主語をもたない構造のみが非人称構文であると見なされ、たとえば(5a)のみが該当する。これに対し機能的なアプローチでは(5a)と(5b)の双方が非人称的な構造であると見なされる。

- (5) a. ロシア語
Svetaet.
dawn.PRES.3SG
「夜が明ける。」 (M&O 2011: 5,6)
- b. 英語
It dawns.
「夜が明ける。」 (ibid.:5,6)

M&O はさらに、[1]から[5]のような機能的特徴をもつ主語を含む構造がどのような形式によって実現されるかについての類型的な傾向を提示した。表 1 はその結果とウェールズ語における方略を示している。

表 1 非人称構文の機能分類と実現形式、およびウェールズ語での方略

	主語の特徴	一般的な帰結	ウェールズ語での方略
[1]	指示的な項でない	・主語の省略／代役主語	代役主語
[2]	不定である	・不定の代名詞 ・非人称専用の動詞形 ・主語の省略	非人称形
[3]	話題性をもたない	・語順の倒置 ・主語と動詞の一致の消失	Dyma 文
[4]	無生物である	・格標示の分化 ・主語と動詞の一致の消失	
[5]	動作主性（意思性）をもたない	・格標示の分化 ・（動詞側の）指標の分化	

（中 2 列は Malchukov & Ogawa 2011: 18, Table 1 に基づく）

[1]指示的な項でない主語を含む構造に関して、M&O では意味的な結合価をもたない天候表現が取り上げられる。ウェールズ語の天候表現は Mae hi'n bwrw glaw 'it rains/ is raining'のように、hi という主格代名詞 3 人称単数女性形を用いて表される。これは代役主語 (dummy subjects) を用いた構造であるため、[1]のタイプの非人称構文に非人称形は関与しないと考えられる。

[3]話題性をもたない主語を含む構造に関して、M&O ではフランス語の Il viendra une femme 'A woman will come' (lit. 'It will come a woman')などの提示文が取り上げられる。この場合 une femme 'a woman'という元々の主語が動詞の一致を要求しなくなることから、統語的な主語典型からの逸脱が発生するとされる。ウェールズ語では主語が新情報である場合に、Dyma hi'n dechrau canu 'here she starts singing'のように Dyma 'here is'によって導入される文を用いるが、ここに非人称形の関与はない。

[4]無生物主語をもつ構造に関して、M&O では主語が有生性をもたない場合に主格ではなく斜格が選択される言語例が取り上げられる。ウェールズ語において、無生物主語を表す特別な構造や形態はないと思われる。主語が無生であることはむしろ非人称形適用の際の制約となる。Arman (2016)は「湖が凍る」ことを意図して(6)のような文をつくった場合、自然な解釈との齟齬が生まれることを指摘している。

- (6) ??? Rhew-ir yn galed
freeze.PRS.IMPS ADVLZ hard
自然な解釈：「誰かが／人(々)は固く凍る」→??? (Arman 2016:96)

これは非人称形が不定かつ人間の主語を想定するためと説明される。この性格ゆえに「凍る」のように無生物を主語（動作主）に取りやすい非対格自動詞は非人称形と相性が悪い。ただしウェールズ語の非人称形は無生主語を表したいという動機のもとに用いられる形式ではないため、表 1 では空欄で示している。

[5]動作主性をもたない主語を含む構造に関して、M&O では動作主が意思性をもたないことをもって「動

作主性がない」と認定される。そのため M&O は動作主の意思性によって主格か斜格かの格標示の分化が発生する文を取り上げている。ウェールズ語ではそのような事例は見られない。ただしウェールズ語の非人称形は受動構造で使われることがあり、受動構造が動作主から焦点を外すために用いられることを考えれば、非人称形を用いた受動文は十分条件的に動作主をもたない主語を含む構造になるともいえる。しかしながら本稿においてこれは非人称形を用いる際の副次的な効果であると考ええる。

ウェールズ語の非人称形に最も関わりがあるのは、[2]不定主語をもつ構造である。M&O ではロシア語の Govor'at (on uexal) 'They say he left' のような主語ゼロの構造や、ドイツ語の Man sagt (er ist gegangen) 'They say (he left)' のように代役主語を用いる非人称構文に加え、過去分詞と目的語のみで構成される(7)のポーランド語例が取り上げられる。

- (7) Podano kawę
 serve.IMPS.PART coffee.ACC
 「コーヒーが出された。」 (Malchukov & Ogawa 2001: 9)

これは Frajzyngier (1986)が自動詞の受身形を用いた非人称受動文と呼ぶものに一致する。Frajzyngier は受身形の自動詞を含む構造が不定かつ人間の主語（動作主）を想定するという事例が多く言語で見られることを指摘する。(8)は Frajzyngier による用例の一部である。

- (8) a. Dokonano prace (*przez uczonych) 【ポーランド語】
 complete.IMPS.PART work.PL (*by scientists.PL)
 'The works are being completed' 「誰かがその仕事を完了した。」 (Frajzyngier 1986:72)
- b. Burada çalışılır 【トルコ語】
 here work.PASS
 'Here it is worked' 「誰かがここで勉強／仕事する。」 (ibid.:275)
- c. Sic itur ad astra 【ラテン語】
 in this way go.PASS.3SG to stars.PL
 'In this manner one goes to the stars' 「このようにして人は星へ行く。」 (ibid.: 277)

このような構文では動作主が共起できないという事実から、Frajzyngier は能動文からの変形によって生まれたものではないと提示する。また自動詞受身形を用いる場合は総じて'bark'のように人間以外が動作主になりうる動作を表す動詞の場合でも動作主が人間と解釈されることから、この構造は不定かつ人間の主語（動作主）を想定する機能をもつと示される。

ウェールズ語の自動詞非人称形は(9)のような不定の主語を想定する構造をつくる。また、前述の(6)で示したように、人間に起こりにくい事象を表す非対格自動詞を非人称化すると不自然な文が生まれることから、非人称形によって想定されるのは不定だけでなく、人間の主語（動作主）であると分かる。

- (9) cwmp-ir yn aml yma
 fall.PRS.IMPS ADVLZ frequent here
 「(誰かが／人は) よくそこで転ぶ」 (Arman 2016:41)

自動詞の非人称形が不定かつ人間の主語を想定するということから、本稿はウェールズ語の非人称形を非人称構文の典型の一つ、不定かつ人間の主語を想定する構造を実現する形式として捉え直すことを提案する。

3. ウェールズ語の非人称形の起源

2 節で提示した類型的な非人称の一典型とウェールズ語の非人称形の類似性は、ウェールズ語の非人称現在形の *-ir* という語尾が印欧祖語の中動態に起源をもつことから説明が可能である。

現代ウェールズ語の起源である島嶼ケルト祖語 (*primitive Insular Celtic*) が印欧祖語から分岐するのに伴い、印欧祖語の中動態マーカーの一つであった *-r* は、欠相動詞 (*deponent verb*) と動詞の受身形のマーカーとして取り込まれた。Cowgill (1983) は島嶼ケルト祖語をより強く保持する古アイルランド語の考察から、印欧祖語の 1/2 人称の中動態語尾は島嶼ケルト祖語の欠相動詞の 1/2 人称の屈折形に、3 人称の中動態語尾は 3 人称の受動形に用いられるという分裂が発生したことを提示している。

表 2 印欧祖語の中動態 (*mediopassive*) と島嶼ケルト祖語の欠相動詞／受身形の対応

	1 人称	2 人称	3 人称
欠相動詞	中動態由来の形	中動態由来の形	新しい形
他動詞受身文	接中代名詞 + 能動態 3 人称形	接中代名詞 + 能動態 3 人称形	中動態由来の形 (単数／複数) + 主格代名詞
自動詞受身文			中動態由来の形

(Cowgill 1983 にもとづく。)

本稿は古アイルランド語とウェールズ語が同種の祖体系をもつとする立場をとる。Cowgill は原初の古アイルランド語の自動詞受身形は 3 人称単数形に限定されており、*cia bethir* ‘although one be’ のように、非人称の機能をもつとする (1983: 74)。これは現代ウェールズ語の非人称形にまで通ずる性格であり、自動詞にも適用でき、不定かつ人間の主語をもつ構造として解釈されるという類型的な非人称の一典型との類似性はここに要因があると考えられる。

ただし表 2 の内容からは、ウェールズ語の非人称形が分析的受動文と混同される原因となっている、自動詞非人称文での形を全く同じ形で動作主を表す句と共起するという現象を説明することができない。この説明には、現代ウェールズ語に至るまでに起きた改新を明らかにする必要がある。

古アイルランド語の他動詞受身形は当初、目的語 (対格) をとれる形ではなかった。3 人称では単数と複数の区別があり、(10a) のように意味上の目的語は主格 (代) 名詞によって表され、動詞の形はその (代) 名詞に一致していた。また 1/2 人称の受動文は (10b) のように、接中代名詞と能動態 3 人称形で構成されていた。

(10) a. *coscitr* *ind fir*
 correct.PASS.3PL the husband.PL.NOM
 「その夫らが収集された。」 (Cowgill 1983:74)

b. *nom* *línfidersa*
 INF.X.1SG *fill.FUT.3SG*
 「私は満たされる(だろう)。」 (ibid.:74)

ところがのちに他動詞受身形が目的語（対格）をとるという変化が生じた (Cowgill 1983: 105)。これは過去時制での改新が他の時制にも広がった結果とされる。元々古アイルランド語の過去受動文は、印欧祖語の中動態に由来する形ではなく、「完了のマーカ-*ro-*+人称代名詞+数と性を標示する分詞形」という構造をもっていた。たとえば原初のアイルランド語では *ros me messas / messā ‘I (masculin / feminin) was counted’* という構造が確認されている (ibid.: 105)。まず数と性を標示する分詞形の語尾が短縮し、*mess* という基本形が生まれた。さらに単数代名詞の主格と対格が同形であったため、この構造は「完了の *ro-*+斜格代名詞+過去分詞」として認識されるようになった。この認識が複数の場合にも適用され、*rosni messa (ro+*主格代名詞 1 人称複数の短縮形+分詞複数形)ではなく *ron mess ‘we were counted’ (ro+*斜格代名詞 1 人称複数の短縮形+性の標示がない分詞単数形)、*rosi messa (ro+*主格代名詞 2 人称複数の短縮形+分詞複数形)ではなく *rob mess ‘you were counted’ (ro+*斜格代名詞 2 人称複数の短縮形+性の標示がない分詞単数形)という構造が定着した。この斜格の獲得、および複数標示の廃止という改新は他の時制にも広がり、*nom línfider ‘I will be filled’* のような接中代名詞と他動詞受身形でつくられる受動文が確立したといわれる。このような変化を経て、現代アイルランド語では *buailtear é ‘someone hit him / he was hit’* という構造が確認される。

Cowgill はウェールズ語は中世ウェールズ語の段階ですでに現代アイルランド語と同じ、古い受動形は非人称文をつくる機能をもつものとして認識され、同じ形を対格形の目的語をもつ受動文としても用いることができる段階にあったと提示している(107)。現代ウェールズ語において(11)のように非人称形と動作主句を表す句の共起が許容されるのは、上記の経緯を経て非人称形を用いた目的語をもつ受動文が確立したためだと考えられる。

- (11) Tal-wyd y cyflogau gan y prif weithredwr
 pay-PST.IMP the salaries by the chief worker
 「給料は主任によって支払われた」 (Thomas 1996: 119)

ただし現代ウェールズ語の非人称過去形は中動態由来でも *ro-*由来でもない *-wyd* という語尾をもつことに注意されたい。この語尾は *bod ‘be’* の非人称過去由来の接辞 *-pwyt* が縮約された形である (Morris-Jones 1913: 327, 338)。この形は他の環境では生起しないことから、ウェールズ語独自のものであるといわれる。つまりウェールズ語の非人称形はそのパラダイムの中に中動態と過去分詞という異なる起源をもつ形をもっており、さらに過去分詞に由来する形が *be* 動詞を反映した形にすり替わるといふ、複雑な体系をもっているといえよう。

4. 一般的発展の方向との逆行

3 節の内容を踏まえ、本稿はウェールズ語の非人称形は不定かつ人間の主語を想定する構造と、動作主を表す句の共起を許容する目的語をもつ受動文を実現する方略になるという二重性をもつことを提示する。不定かつ人間の主語を想定するという性格は印欧祖語の中動態を直接引き継ぐものであり、受動の機能は非人称形（他動詞受身形）が斜格目的語をとれるようになったという改新があつて備わったことを考えると、ウェールズ語の非人称形では非人称的機能→他動的機能という方向での発展が起きたといえる。

これとは逆に、典型的には目的語をもつ他動的な構造から非人称文が生まれたという変化が一般的である。これは Malchukov & Ogawa (2011) が他動的非人称 (transimpersonal) 構文と呼ぶタイプのものである。このような構文はロシア語やアイスランド語などにみられ、元々(12a)と(13a)のような他動詞文の対格目的語であったものが(12b)と(13b)のような斜格主語になるという背景をもつ。

(12) a. Men'a tr'asët lixoradka
 1SG.ACC shake.PRS.3SG fever.SG
 「熱が私を震わせる。」 (Malchukov & Ogawa 2011: 26)

b. Men'a tr'asët
 1SG.ACC shake.PRS.3SG
 「私は震える。」 (ibid.:26)

(13) a. Straumurinn rak bátinn á land.
 current.SG.NOM.DEF drift.PST.3SG boat.SG.ACC.DEF on land.SG.ACC
 「潮の流れがそのボートを座礁させた。」 (入江 2015: 16)

b. Bátinn rak á land
 boat.SG.ACC.DEF drift.PST.3SG on land.SG.ACC
 「そのボートは座礁した。」 (ibid.:16)

他動文の斜格目的語が主語になることで非人称的構造が生まれていることから、このようなタイプの構文は他動文→非人称文という変化を遂げたといえる。このような傾向をふまえ、本稿は非人称受身の成立背景について、非人称文から目的語をとる受動文が生じたというウェールズ語の発展は、非人称受身が改新によって生じた一般的变化とは逆方向のものであると結論する。

略号一覧

1/3 : 1人称、3人称 ADVLZ : 副詞化辞 DEF : 定 IMPS : 非人称形 INFX : 接中代名詞
 NOM/ACC/POSS : 主格、対格、所有格 PART : 分詞 PASS : 受身形 PRS/PST : 現在形、過去形
 SG/PL : 単数、複数

参照文献

- Arman, L. (2016). *The Welsh impersonal construction* (Doctoral dissertation, University of Manchester, Manchester, UK). Retrieved from <https://www.escholar.manchester.ac.uk/uk-ac-man-scw:295940>
- Awbery, G. M. (1976). *The syntax of Welsh: A transformational study of the passive*. Cambridge University Press.
- Frajzyngier, Z. (1982). Indefinite agent, passive and impersonal passive: A functional study. *Lingua*, 58, 267-290.
- Malchukov, A., & Ogawa, A. Towards a typology of impersonal constructions: A semantic approach. In Malchukov, A., & Siewierska, A. (eds.) (2011). *Impersonal constructions: A cross-linguistic perspective*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins. 19-56.
- Morris-Jones, J. (1913). *A Welsh grammar, historical and comparative : phonology and accidence*. Oxford : Clarendon press.
- Thomas, P. W. (1996). *Gramadeg y Gymraeg*. Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.
- 入江浩司 (2017) 「現代アイスランド語の非人称構文の機能的分類」『金沢大学歴史言語文化学系論集. 言語・文学篇』9: 39-50.